MLC240　国際文化交流論

2 年　3, 4 クォーター

担　当　教　員	今井　祐子
授　業　形　態	講義
ｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞ	該当しない
単　　位　　数	２
曜 日 ・ 時 限	集中(Ｈ３０のみ)

授業概要

グローバル化が叫ばれる現代は、世界各地から人や物や情報がどんどん入り、様々な分野で国際交流が盛んになっている。文化の領域でも、外国文化を紹介するイベントが日本各地で実施され、日本文化の紹介も世界各地で行われている。また、今日的な外交においては、伝統的な政府対政府の外交に加えて、民間と連携しつつ広報や文化交流を通じて外国の国民や世論に直接働きかける新しい外交戦略や活動が必要とされ、実践されている。さらに、現代社会では文明は一つになりつつあるが、文化は多様化している。そうした現状を踏まえてこの授業では、近現代の各国の文化交流活動、日本の文化外交と文化交流の歩み、外国人から見た日本文化の特色など、グローバルな視点で日本文化のあり方を考えるために必要な知識を学ぶ。

到達目標

学生は、

（１）文化や文化交流の概念、および国際社会の構造変化に伴う文化交流のあり方と意味づけの変遷について学ぶ。

（２）文化交流の視座から万国博覧会と近代オリンピックの歴史を学ぶ。

（３）パブリック・ディプロマシーとソフト・パワーの概念を学び、今日的な外交と文化交流との関係について理解する。

（４）国際交流基金の取り組みや代表的な日本文化論（日本人論）の概要を学ぶ。

期待される効果

国際的な視野から見た日本文化、および多文化共生社会の実現に寄与する日本文化のあり方を考えるための思考力を養うことが期待される。

先修科目

特になし。

但し、この授業の後に「比較文化論」を受講すると、日本をめぐる文化交流に関する理解がより深まるので受講すると良い。

教科書・参考資料等

初回の授業で、テキスト「国際文化交流論」を配布する。

参考書：

松村正義著『国際交流史』（地人館、2002 年）

青木保『「日本文化論」の変容』（中央公論社、1990 年）

授業の方法

この授業は講義形式にて進める。テキスト「国際文化交流論」の内容に従って、視聴覚資料を効果的に活用しながら講義する。

成績評価

リアクション・ペーパー：

講義を聞いて新しく学んだこと、講義の中で最も印象に残った点、講義内容に関する疑問・質問などを書く。

レポート：
　教員が指定するテーマについて、授業で学んだことと自分で調べたことをまとめて、レポート（2,400字程度）を作成する。

成績

４０％　リアクション・ペーパー
６０％　レポート

授業スケジュール

第１回：　文化共存の道を考える
　授業に関するオリエンテーション。国籍や民族の異なる集団が存在する社会において、それぞれの集団が対等な立場で扱われ、互いの文化的違いを認め合い、それぞれの能力を発揮しながら共に生きるための課題に関する識者の考えを理解する。

第２回：　文化交流の歴史
　6つの基軸（方法・形態、目的・効果、主体、媒体、意識、国際社会の構造）から文化交流を捉え、国際社会の構造変化に伴い文化交流のあり方や意味づけがどのように変わったのかを歴史的に跡づける。

第３回：　文化交流の概念
　用語の意味を通して文化と交流の概念に関する理解を深めるとともに、様々な視点から対比的に文化交流を捉え直すことで、文化交流が世界的協力の基本的な要素であることを学ぶ。

第４回：　19世紀の万国博覧会とジャポニスム
　19世紀半ばの西洋諸国で産業振興と連動しながら開催された万国博覧会の機能と、19世紀後半に西洋で流行したジャポニスム（日本趣味）という文化現象が万国博覧会を通して進展した過程を学び、19世紀の万国博覧会が文化の力を競う場であったことを理解する。

第５回：　明治・大正期の国際情勢と日本――欧化主義、黄禍論――
　日清・日露戦争後に軍事国家への道を突き進んだ日本が国際社会で孤立していく過程を確認しつつ、19世紀末から20世紀初頭にかけての日本をとりまく国際情勢が、日本をめぐる文化交流や海外に住む日系移民の生活を変容させてしまった歴史を学ぶ。

第６回：　対外関係と文化交流①――近代オリンピック――
　ギリシアで行われていた古代オリンピックを復活させる形で19世紀末の西洋に誕生した近代オリンピックを取り上げ、芸術競技、オリンピック讃歌、オリンピック映画などを通して、初期の近代オリンピックでは国際親善やスポーツと芸術を統合する必要性が説かれていたことを学ぶ。

第７回：　対外関係と文化交流②――国際映画祭――
　国際映画祭とヒトラーおよびムッソリーニ、国際映画祭における邦画の評価、日本のユネスコ加入、サンフランシスコ対日平和条約締結などを通して、戦後日本の国際社会への復帰と文化外交との関係、および対外関係に及ぼす映画の影響を理解する。

第８回：　映画「羅生門」の視聴
　1950年に日本で公開され、翌年開催のヴェネチア国際映画祭で最高賞の金獅子賞を受賞した黒澤明監督の映画「羅生門」を視聴する。

第９回：　対外関係と文化交流③――1964年東京オリンピック――
　政治と人種差別の視座から見た近代オリンピック史、1940年に開催予定であったが中止された幻の東京オリンピックから1964年東京オリンピック開催までの苦難の軌跡、1964年東京オリンピックにおけるデザイナーの活躍を学び、スポーツの祭典であるオリンピックも、アスリートやスポーツ関係者だけで成り立つイベントではないことを理解する。

第１０回：　対外関係と文化交流④――パブリック・ディプロマシー――
　1960 年代にアメリカで生まれ、1970年代以降に各国に急速に広まったパブリック・ディプロマシーと呼称される新しい外交戦略の概念とその実践例を学び、外交官のみが国際関係の処理を担う伝統的な外交だけでは不十分となっている今日的な外交のあり方と文化交流との関係を理解する。

第１１回：　対外関係と文化交流⑤――ソフト・パワー――
　1990年代にアメリカで提唱され、目下、多くの国の政府が注目するソフト・パワーと呼ばれる外交戦略の概念とその実践例を把握した上で、当初提唱された概念とは異なる形でソフト・パワーの増進という国策が各国で展開されている現実とそこに潜む問題を理解する。

第１２回：　国際文化交流機関――国際交流基金の活動――

自国に対する諸外国の理解を深め、国際的な相互理解や友好親善を促進するために、語学教育、広報・文化事業を効率的に展開している各国の国際文化交流機関の成立と活動内容について学ぶとともに、日本の国際交流基金の活動について理解を深める。

第１３回：　外国人と日本文化①――世界の日本学――

大戦後に世界で数多く発表された主な日本文化論（日本人論）の概要やその変遷を学び、外国人によって鋭く見出された日本文化の特徴について理解する。

第１４回：　外国人と日本文化②――クール・ジャパン――

2002 年に外国人ジャーナリストによって提唱されたクール・ジャパン（かっこいい日本）という概念を通して注目されるようになった日本の文化力の特色、およびその国際的な影響力について理解を深める。

第１５回：　多文化共生都市

多文化共生都市のメリットとデメリットや、多文化共生に関する各国の取り組みを学ぶ。

事前・事後学習

・授業毎の予習：　テキストの該当箇所を予習する（約１時間）。
・授業毎の復習：　参考書を通して授業内容に関する理解を深め、疑問点を整理する（約１時間）。
・受講期間全体にわたる学習：　新聞・雑誌、インターネット等より授業内容に関する時事情報の収集を継続し、それらの情報を学期末レポートの作成時に活用する。